

### はじめに

今、農業が注目を浴びている。その背景には、TPP 交渉問題や、大企業の参入など、農業界を取り巻く社会の大きな動きがある。しかし、それと同時に、農業従事者の高齢化・減少化、それにともなう土地の荒廃化、など、農業に関するさまざまな問題も浮き彫りになっている。私たちは、そんな我が国の食を支える産業の危機に不安を抱くとともに、それを営む人々に関心を抱くようになった。だが、農業を身近に感じることなく生活してきた私たちがあれこれ考えるだけでは机上の空論となるに過ぎない。そこで、農業従事者の現状を知るためには、実地に赴くしかないという考えに行き着いた。

研修先を決めるにあたってはインターネットを活用した。その過程で、「新規就農」という語を多く目にした。特に、農業が盛んな九州地方での新規就農に対する取り組みは活発で、また、新規就農者自身が主体的にさまざまな情報を発信していることが分かった。そこで、福岡県糸島市を拠点に活動する新規就農農家の沖祐輔さんと大石仙一さんのお二人にお話を伺う機会を設けていただき、農業や農業に従事する方々に対する私たちの漠然とした関心や疑問を、何らかの見解に変えていきたいと思った。

8月18日（月）

インタビュー初日は、オクラなどを栽培する農家・沖祐輔さんのもとへ伺った。農業とは全く無縁だったという沖さんは、後継者のいない農家の方から土地を借り、一から農業をはじめた経歴を持ち、さらに高齢化が進む農業界では斬新な試みとして、動画サイトや SNS を活用した積極的なプロモーション活動を行っている。さまざまな質問をさせていただいたのだが、なかでも印象的だったものを取り上げる。

**Q:** TPP 交渉問題に関連して、これから外国産の安価な商品がどんどん輸入されるかもしれないことに対して、どう考えているか。

**A:** とてもいいことだと思う。

逆の答えが返ってくると思っていた私たちにとってはかなりの驚きだった。沖さんいわく、外国産などの安い商品が国内市場に流入することによって、市場の競争が激化し、そのため淘汰される農家がいるかもしれないが、結果として消費者には安くて品質の高い商品が届くことになる、とのことだった。絶えず変化を続ける社会の中で、保守的態度を貫こうとするほうがおかしい。自ら変化に対して積極的に挑み、乗り越えていくことが大切なのではないか。それらの言葉からは、沖さんが日ごろからいかに作物に対して情熱を注ぎ、いかに自身の作物に対しての信頼が高いのかが強く感じられた。

**Q:** 農業において問題だと思うことは何か。

**A:** 補助金を与えられていることだと思う。

さまざまな事情のため、農家には政府より補助金が支給されることがあるという。しかし、それがかえって農家を甘やかし、政府の負担を増やすことになるのだと沖さんは言う。変化に取り残され、それでもなお変わろうとしないものではなく、新たな世界に

飛び込み、挑戦しようとするものこそ支援するべきではないか。実際、新たに農業をはじめようとする人にとって、広大な土地や莫大な設備費用を調達することは至難の業であるという。本当に助けを必要としている人に、救いの手がさしのべられない。それは、農業のことをその身をもって知らない人々が制度をつくってしまったからだ。などといった、メディアで得られる間接的な情報だけでは得られない声を直に聞くことができたことに対して感銘を受けると同時に、農業の根底に横たわる問題の思った以上の大きさに、自分がこれまでいかに何も知らずに過ごしてきたかを気づかされた。しかしながら、変化に対して積極的で、さらに自ら新しいものをつくり出そうとする沖さんの姿勢には、こちらまで勇気をもらい、そのうえ私たちの「生き方」についての価値観を変えてくれたように思えた。

8月19日（火）

インタビュー二日目は、コメや野菜などを栽培している大石仙一さんのもとへ伺った。大石さんはもともと銀行に勤めていたが、農家に転身された経歴を持ち、自身の農園で農業体験教室を開講している。今回、そこで農業体験をさせていただき、農業の大変さを切に感じ、その苦勞の成果である作物のおいしさに感動した。また、大石さんのご厚意で、同じく糸島市に拠点を置く農家の久富陽子さん、三角麻里子さん、小林麻紀さん、山口彰さんにもお話を聞く機会を与えていただいた。さまざまな農家の方の意見を受け取ることができ、私たちにとって非常に有意義な時間となった。

**Q:** TPP 交渉問題に関連して、これから外国産の安価な商品がどんどん輸入されるかもしれないことに対して、どう考えているか。

**A:** 反対はしない。

ほかの農家の方も同様の意見だったので、私たちはふたたび驚かされた。安い商品だから、人気になるかもしれない。しかし、安いだけで品質の悪いものであれば、消費者は、少し高くても品質が良く、安心して食べられるものを選ぶだろう。そして、日本の多くの農家の方は、そういった品質のものをつくっているはずだ。そう言われて、確かにと思うことがらっていくつか頭に思い浮かんだ。外国産に対抗できる点は、クオリティにある。特に糸島市の農家は無農薬で栽培しているところが多く、それゆえ全国的に糸島産の作物は人気が高いのだという。日本の農業の強さを見せられたような気がした。

さらに、消費者と農家を直につなぐコーディネーターも兼ねる久富さんからは、その立場ゆえの貴重なお話を聞くことができた。人と人とのつながりが希薄となった現代では、「知らない」ことが増えているという。というのは、スーパーで野菜を手にとるとき、その野菜をだれが作ったのか分からないことが多い。最近では、産地や生産者名、さらには生産者の顔写真などが付記されていることもあるが、それでも生産者を生で見、どんな人物かを知ることはできない。久富さんは、そんな現状を変え、消費者が真に安心して商品を手にとることができるよう、生産者のもとで販売を行うという取り組

みを行っている。さらには、消費者自身が収穫するという新しい試みもなされている。そのほうが、野菜のおいしさが一層引き立つとのことだった。久富さんは、昔あったはずの、人と人との密接なつながりによる安心を提供したいのだという。ただ、これは過去を模倣しているだけではない。現代の人々の、安心できてよりおいしい野菜を食べたいというニーズに応じ、さらに糸島という農業地帯の強みを生かした、変わりゆく時代への対抗策なのである。沖さんからも学んだことだが、変化を続ける世界では、立ちどまっているのではなく、それに立ち向かい、新たな可能性を見出していくことが求められる。そしてそれを支える核になるのが、農業であれば、作物を育てるにあたっての努力や情熱、それに基づく作物のクオリティに対する絶対的な信頼ではないだろうか。これは私たちの「生き方」にも関連するように思える。私たちを支える核となるのは何であるのか、考えていきたい。

#### おわりに

私たちのような農業にかかわりの薄い人々に対して、何か伝えたいことはあるか、という質問に対して、沖さんと大石さんの両方とも、野菜の旬を知ってほしいということ、と回答された。野菜の旬を知れば、その野菜が一番安くておいしく食べられる時季を知ることができる。つくった野菜をおいしく食べていただくことが一番うれしいことなので、旬を知ってもらいたい。という言葉を二日続けて聞いたのには感嘆した。それと同時に、この国の食を支えてくださっている方々はこんなにも素晴らしい方々なのかと誇らしく思った。本研修で、私たちはさまざまなことを学ぶことができた。もちろん、農業に対して自分なりの見解を得ることはできたのだが、それ以上に自らの価値観に影響する部分が大きかったように思える。忙しい時期にもかかわらず、本研修に賛同し、あたたかい対応をしてくださった農家の方々に心から感謝したい。